

18 改革後の東ヨーロッパの日本研究

セップ・リンハルト (ウィーン大学)

(1) 改革前東ヨーロッパ社会主義国における日本研究の状況

今回主催者の国際日本文化研究センターから私に与えられたテーマは大変難しいものがございます。このテーマはこれからの世界の日本研究にとって非常に重要なテーマであると私もよく認識しておりますが、私は主催者側の期待に応えられるかどうか分かりません。私は今まで27年間ヨーロッパで日本研究をいたしてまいりましたが、特にヨーロッパ、あるいは東ヨーロッパにおける日本研究の研究をしてきたわけではございませんし、東ヨーロッパあるいは社会主義の専門家でもございません。それにもかかわらずこのテーマのスピーカーとして主催者が私を選んだ理由は2つ考えられます。第1の理由は、私は2年前ヨーロッパ日本研究協会の会長に就任したことから、会長の仕事の一部として東ヨーロッパの日本研究者とも連絡を取り、東ヨーロッパの日本研究についてある程度の情報を得なければならなかったと思われているであろうということ。そして第2の理由は、私の母国オーストリアは東ヨーロッパ諸国と隣りあっているため、東ヨーロッパ諸国についての情報は特に手に入り易いと思われたのかもしれないということです。オーストリアの首都であるウィーンは、日本の大使館、新聞社、商社などのためにもう何十年間も東ヨーロッパの情報データ・バンクの役割を果たしております。この私の説明があっているかどうかはわかりませんが、私は前もって申し上げておかなければならないことがございます。私は東ヨーロッパの日本研究者の体系的なサーヴェーをおこなったことがございません。そういうサーヴェーとしては国際交流基金から4年前に出た便利な本『ソ連・東欧における日本研究』がありまして、私もこの話を準備するときに非常によく参考にさせていただきました。しかしこういう体系的な報告書と違って、私は主に自分自身の体験にもとづいて東ヨーロッパの日本研究について話をさせていただきたいと思えます。

東ヨーロッパはソビエト連邦を含めると9つの国からなっています。日本学、日本研究の発展はこの9つの国々それぞれによって大分違ってきます。その中にはソビエト連邦のように日本学の歴史を江戸時代にまでさかのぼれる国も、アルバニアのように日本学の研究を未だ全然やってない国もございます。この2つの国は極端な事例であり、その他の7つの国では日本研究がこの2つの発展段階の中のどこかに位置づけられます。しかしある国で日本学の歴史が割合に早い時点で始まったとしても、それはその国の日本学の現状についてなにも語っていません。ヨーロッパの歴史に断絶が多いように、このヨーロッパの日本研究の歴史にも断絶はたくさんございます。こういう日本研究の断絶の事例としてはハンガリーがあげ

られます。ハンガリー人は日本人が大変好きでございまして、最近の世論調査によると、ハンガリー人の好きな民族第2位が日本人ということになっています。ハンガリー人の多くが日本人はハンガリー人の親族であると思っているらしいのです。こういう関係もございまして、19世紀の後半、20世紀の初めにハンガリー人による優れた日本研究がございましたが、第二次大戦後ハンガリーでは日本学がいつの間にか消えてしましまして、つい最近までは殆どなにもなかったわけでございます。

簡単に、戦後いわゆる社会主義体制の下で日本学が発達した国、あまり発達しなかった国と全然発達しなかった国の3段階に分類してみると、ソビエト連邦、ポーランド、チェコスロバキア、東ドイツの4か国が、日本学が大学の研究機関からみても、論文の数と質からみても、研究者と学生の数からみても、一番進んでいる最初のグループに属するのではないかと思います。残りの5か国の中のブルガリアとユーゴスラビアとハンガリーにおきましては日本研究、日本学は少しあるにもかかわらず、まだ成熟しておりません。ルーマニアとアルバニアの日本研究について私は一度も聞いたことがございませぬので、この2つの国が日本研究については一番遅れていると言えるのではないかと思います。この国の位置をヨーロッパの地図でながめると、日本学が発達した国は全部北にありまして、日本学の未熟な国は全部南にあります。世界経済体系に南北問題がございませぬと同じように、東ヨーロッパの日本研究の発達にも南北の大きな差異があると思います。この各国の日本学の発展段階を直接それぞれの国の経済力と結び付けることもすぐに頭に浮かんでできますが、そう簡単ではないようでございませぬ。確かに東ドイツとチェコスロバキアという中央ヨーロッパに位置する国は経済的にも一番進んではおりますが、日本学の発達性という点でトップに位置するポーランドはそうではございませぬ。また経済的に割と恵まれたハンガリーでは、日本研究がつい最近までおおきな成果を挙げられませぬでした。ソビエト連邦につきましては、この国で日本研究が大変進んでいることはこの国の経済力とあまり関係がなくて、むしろ政治的な理由によると思います。

東ヨーロッパの日本研究の外から見た間違いの多い番付作りはこのくらいにして、次にこれらの東ヨーロッパの国々の従来の日本研究の特色に触れたいと思います。最初に東ヨーロッパの日本研究機関について簡単に申し上げますと、西ヨーロッパと違って東ヨーロッパでは日本研究の主な研究機関は大学ではなく、いわゆる国立アカデミーという学生がいない大きな研究機関でございませぬ。この各国のアカデミーにいる日本研究者がそこで静かに研究することができました。もちろんその研究テーマは自分で自由に決めるのではなく、国にとって重要なテーマを研究しなければなりませんでした。だからこういう研究の結果の多くは一般の人々のために公開されず、出版されもしませぬでした。ここで見逃していけないのは各国の外務省と日本にある大使館の研究機関としての役割でございませぬ。アカデミーの日本研究もある程度の政治的な偏りをしめしておりますが、外務省や大使館の日本研究はもっぱらお国のための政治的目標にあった研究でございませぬ。同じような状態は多分他の国にもあるかもしれませんが、社会主義体制国家では日本研究の一番優秀な人達が大学に残らないで、やはりアカデミーや外務省で仕事をしたわけでございませぬ。特に外務省に勤務した人々は党

員でなければならなかったわけですから、1989年秋の政治的変革の後は、彼らはいくら頭がよくても、日本語や日本研究の才能があっても、一般の研究機関への就職が非常に難しいのです。ウィーン大学の事例を挙げますと、最近、東ドイツの日本研究者の就職応募が2つありまして、両方とも前に東ドイツの外務省に勤めていた方でした。

第3番目の日本研究機関はもちろん大学でございます。アカデミーや外務省の日本研究が政治的な関心や必要性から生まれた日本研究の偏りを示すと同じように、大学の日本研究や日本学もまたある偏りを示しています。それは日本語教育や日本文学の翻訳への集中的な関心と言えましょう。日本語教育はもちろん、どの日本研究の基本にもなるはずでございますから、これは東ヨーロッパの日本学の特色というわけではございません。しかし東ヨーロッパの大学に勤務している日本研究者の日本文学の翻訳の量は、西ヨーロッパの日本研究者の何倍かであると思います。私は一度も日本語からの翻訳をしなかった者としてそれを不思議に思っていたので、いろいろな東ヨーロッパの日本研究者に聞き調べた結果、次のことが分かりました。西ヨーロッパではいくら翻訳をしても、大学のなかの地位を高める助けにはなりませんし、翻訳料としてもたいしたお金はもらえませんから、大学研究者の中で翻訳の仕事をする人は非常にまれでございます。日本文学の翻訳をやる人々は大体お金を稼ぐためや業績をあげるためではなく、ある作家の作品が非常に好きであるから、その作家の素晴らしい作品を世に紹介しなければならないという義務感で翻訳をしております。ところが東ヨーロッパでは事情が違っていました。大学での地位は西ヨーロッパと違って論文の数と学術書の出版にはあまり関係なく、その他の因子で決定されています。その因子とは党員であることとか国家体制の中で上手に動くこととか支配者側とコネで結び付いていることとか、全体主義国家でどこでもいつでも働いている因子でございます。そういう状態ですから、論文は書かなくてもいいわけです。論文を書けばかえってある程度自分自身の価値観も表さなければなりませんから、その価値観が全体主義国家のイデオロギーと合わなければ論文を出版することさえも危険なわけでございます。翻訳の仕事では逆に自分自身の価値観を隠すことも可能にしています。その上に東ヨーロッパの国々は閉鎖された国でありましたから、それぞれの国民は外国に対して大変な好奇心をもっていました。その社会状態の結果として、日本文学の翻訳書が出ると間もなく売り切れになってしまいました。もちろん翻訳をした日本研究者にとっても、これは西ヨーロッパの翻訳仕事よりも大変満足できる状態でございます。たとえば西ドイツでは現代日本文学の作品の翻訳を出しても読者は殆どいないし、新聞、雑誌にもその反響は殆どありません。出版社は外国文学の紹介を自分の義務として扱っていますから、その義務を最低限の規模で果たしているだけです。資本主義社会では利益が出ない事業は出版社にとっても全然面白くはありません。東ヨーロッパでいろいろな翻訳がたくさんあるというこの点では、東ヨーロッパの日本研究が優れています。9つの国々でその何倍かの言語が使われていますから、ロシア語を別とすれば、英語・スペイン語・フランス語のような一つの大きな文化圏ではありません。ですから同じ作品はいくつかのスラブ言語にも翻訳されています。東ドイツの場合は事情が違って、西ドイツの出版社は東で翻訳されて出版されたものの出版権を安く買って西で出版しており、東で売り切れになった本

が西で売れ残りとなったケースも少なくはありませんでした。翻訳された作品をみますと、支配的イデオロギーの関係で60年代まではプロレタリア文学関係のものが多くありますが、70年代になりますと、世界でどこでも紹介されているものはやはり東ヨーロッパでも出版されるようになりました。このようなものとしては、安部公房、三島由紀夫、川端康成、谷崎潤一郎などの作品がございますが。

従来の東欧の日本研究が西ヨーロッパの日本研究に殆ど影響を及ぼさなかった理由は、またスラブ言語の使用にあります。西ヨーロッパの日本研究者は自分の母国語と日本語以外は英語ぐらいしかできないのが普通でございますから、ハンガリー語やポーランド語やチェコ語ではどういう論文が出版されたか全然とっていいほど関心を示しませんでした。他方、東欧の日本研究者は英語という国際学術使用語で論文をあまり出さなかったのでございます。言い換えればアイアン・カーテンが学問の世界にも存在したわけです。

このアイアン・カーテンにいくつかの穴をあけたのは東海大学、特に藤牧新平先生が全ヨーロッパの日本研究のためにお尽くしになった努力や、私が現在代表をつとめておりますヨーロッパ日本研究協会がその創立時からとっていた政策でございました。1972年に日本ペンクラブが京都で初めて大きな日本研究国際会議を開催したのはあまりにも有名な話でございますが、それは両ヨーロッパの日本研究者にとって最初の接触の機会でもあったことも忘れてはいけません。それをきっかけにして東と西の学者達は自発的に、大変楽観的にヨーロッパの日本研究者の協会を作ろうと決めました。そして東と西の交流を楽にするためにその協会の事務所を中立国オーストリアのウィーンに置くことに、東西両方の学者が賛成しました。翌年発足した協会は最初からいくら難しくても東ヨーロッパの学者が協会に参加出来るようにいろいろと工夫いたしました。協会が発足した1973年は、いわゆる「プラハの春」がソビエト連邦の軍事介入によって終焉をとげてからまだ5年しかたっていない時でございましたから、東と西の交流はまだ今からでは想像もできないほど難しかったのです。第一の問題はもちろんソビエト連邦の日本研究者の行動でした。レニングラードの日本学者は最初から協会のメンバーになって参加しましたが、主流であるモスクワの学者は参加せず、何回手紙を出しても返事が来ないという状態でした。また、モスクワの日本研究者が参加しないことはその他の国の日本研究者も非常に気にしており、彼らは自分が参加したくてもモスクワの学者が参加するまでは参加できないと我々に訴えたのです。協会の入会の誘いに冷たい態度を示したのはソビエト連邦の人々以外でチェコ、東ドイツ、そしてブルガリアの学者でした。逆に最初からソビエト連邦の学者の態度を気にしないで喜んで協会のメンバーになったのは、ポーランドやハンガリーやユーゴスラビアの人々でした。協会の毎年の会費はほんの僅かですが、西ヨーロッパの外貨が非常に手に入り難い東の学者にとっては、そのために入会できないことも少なくなかったようでした。会費のかわりに日本関係の図書を送ってもいいと決まってからは、多くの学者がこの会費の支払い方法を利用しました。東ヨーロッパの日本研究者は外貨との関係でいままでいつも西ヨーロッパで3年ごとに行われてきたヨーロッパ日本研究協会にももちろん参加することができませんでした。幸いにヨーロッパ日本研究協会の発足1年前に、世界の日本研究のために非常に大事な国際交流基金が日本でスター

トいたしまして、基金の援助で最初の学会から毎回東欧各国から日本研究の代表者1人を招待することができました。一般には東ヨーロッパの会員は少なかったのですが、協会の役員が最初から今まで協会次長の役を東ヨーロッパの日本研究者の1人の代表のためにとっておきましたので、歴代次長としてポーランドのコタンスキ先生やメラノビッチ先生やハンガリーのヘルナーディ先生が協会のために全力を尽くしてくださいました。

ヨーロッパ日本研究協会のこういう政策の補足とも言えるかも知れませんが、東海大学が1977年からヨーロッパでいくつかの日本会議を主催しました。その中で1980年にワルシャワ大学、1984年に東ベルリンのフンボルト大学で開かれた2つの会議は東と西の日本研究者の交流のために特に大きな意味を持ったと思います。東ヨーロッパの日本研究者と古い関係、深い関係をもっているこの東海大学——東海大学は東欧諸国から日本学の学生を日本語教育のために日本に定期的に呼んでいる一方でそれぞれの国々に日本語の教師を派遣している——この東海大学でなければ、こういう事業を実現できなかったでしょう。国際交流基金、東海大学、ヨーロッパ日本研究協会という3つの団体の15年以上にわたる努力のおかげで、東ヨーロッパの日本研究の領域においてはペレストロイカが早く始まったとも言えるのではないのでしょうか。

私はここで東ヨーロッパの日本研究の業績の一つ一つについて述べる余裕がありませんし、そういう資格も持っていません。ですから私はこの辺で過去の東ヨーロッパの日本研究に関する話をやめて、去年の秋から行われている東欧の政治変革がもたらした諸問題へと話題を変えたいと思います。

(2) 東ヨーロッパ諸国の政治改革のもたらした問題点

1989年の夏、秋にそれまでだれも夢にも思っていなかったことがオーストリアの隣国ハンガリーにおいて相次いでおきました。夏の休暇をハンガリーで過ごしていた東独の人々が休暇が終わった時に彼らの故郷の東ドイツに帰らないで、その代わりにハンガリーとオーストリアの国境に向かったのです。そして、この国境でハンガリー軍の兵隊たちは東ドイツの人々を引き留めようとしなかったのです。この事件の噂はまたたく間に東ドイツに広がり、その結果、また多くの人々が相次いで同じルートで彼らの国、東ドイツを離れました。東独の政府はしばらくはこの難民の波を止めようとしていましたが、数週間間に諦めて東独の国民に完全な旅行の自由を認めました。しかしこの従来の政治を100パーセント変えた絶望的な行動も、東独の社会主義体制を救えませんでした。1年も経たないうちに西ドイツと東ドイツの合併が終わって、新しい統一ドイツが出来たことは皆さんよくご存じのとおりでございます。

東ドイツの変革は全社会主義国家に大きな影響を及ぼし、いつの間にかそれぞれの国で政治変革が行われました。西欧のマス・メディア、われわれ西欧の人間も戦後冷戦時代の産物であった非人間的政治体制が終わって、ヨーロッパに新しい自由の時代、民主主義の時代が到来したと喜んだわけでございます。それまで西欧で一番重要なテーマであった1992年のEC共同体の実現に関する話は急に第2のテーマになりました。しばらくの間みんな東ヨーロ

ツパの諸事件ばかりを話の種にしました。しかしご存じのようにこの過程はまだ終わっていません。特にブルガリア、ルーマニアでは古い政治体制が力強く残っていて、われわれ西ヨーロッパの人間が理想とする民主主義制度の実現まではまだ大変遠いように思われます。今のような不安定な時代が東欧諸国のどこでもしばらく続くでしょう。もちろん政治的な不安だけではなく、経済的な不安もあって、東欧諸国国民はその経済的な不安を政治的に不安定な状態よりももっと気にしているように見えます。共産主義のもとの経済制度はもちろん資本主義経済と比較になりませんが、ある程度機能を果たして全国民に最低限の生活を確保しました。しかしその後は社会主義経済から資本主義経済への過渡期に入りまして、これは国家が今まで確保した生活の基盤がなくなる一方で、資本主義経済の可能性もまだ充分には発展していないために、多くの人にとって大変困難な過渡期になりました。その経済的困難の影響で社会主義政権がなくなってからも、「政治難民」ではなく、いわゆる「経済難民」がたくさんオーストリアをはじめ、西ヨーロッパへやってきました。西の人々は共産主義からの「政治難民」に対しては同情を感じましたが、今や自由で民主的な国になっているはずの東欧の国からの「経済難民」に対しては同情的な態度ではなく、冷静な態度を取っています。政治家は東ヨーロッパの経済援助などの東欧政策についてきれいごとを言っていますが、西側の庶民の多くはそれが実現するまでに、あるいはそれが実ってくるまでに、東からの経済難民が自分たちが積み上げた経済的な豊かさを奪い取りにくるのではないかと非常に心配しています。

もう1つの大きな問題、あるいは一番大きな問題は新民族主義や反ユダヤ人主義の爆発でございませう。19世紀にはハプスブルグ家の支配に対して東欧ではパンスラブ主義という全スラブ民族主義が発展しましたが、そういう思想がいまはもう全然といっていいほど残っていないということが、去年から今年の政治変革の前に明らかになりました。しかし西側のインテリが進歩的思想であると思った共産主義の思想のもとに、これほどの古臭い民族主義や反ユダヤ人主義が残っていたことは、われわれにとって本当に驚くべき事実でございませう。チェコスロバキアにおけるチェコ族とスロバキア民族の対立、ルーマニアでのチャウシェスクの没落の序曲ともいえるハンガリー人とルーマニア人の対立、そしてその後のルーマニア人といわゆるジプシー民族との対立、ブルガリアでのブルガリア人とトルコ人との対立、などがその例でございませう。民族問題が一番大きな問題になっている国は、ソビエト連邦とユーゴスラビアでございませう。これらの国には民族の数が大変多く、両国とも近い内にくつかの民族国家に分裂するという予測もございませう。チェコスロバキアでも、ハンガリーでも、ユーゴスラビアの大部分でも、今までの共産主義イデオロギーのかわりに極端な右翼主義が政治の主流をなしています。一つの象徴的な事例をあげると、クロアチアの首都では最近また50年ぶりにイエラチチという19世紀の騎士団のリーダーの記念像が設置されたそうです。このイエラチチという人物は1848年の市民革命のときにハプスブルグ王の世話人として彼の騎士団とともにウィーンにやってきて、憎まれたハプスブルグ王を地方へ追い出した市民を打ち倒して、民主的革命を駄目にした最大の犯罪人の一人でございませう。共産主義時代にはそういう人の記念像はもちろんみな廃止されたのですが、共産主義の絶対主義時代が終わ

り、自由を得て間もなくイエラチチのような非民主的指導者の復活活動をやるクロアチア人は、本当に価値規準を完全に失ったように私には見えます。民族主義や反共産主義を今の東欧諸国の主な価値にすれば、これらの国々において真の民主主義はまだ非常に遠い目標であると私は思います。少し長くなりましたが、私はこういう政治的背景に注意を払わないと、これからの東ヨーロッパ諸国の日本研究についてもなにも言えないと思っているのです。

(3) 変革後東ヨーロッパの日本研究

東ヨーロッパの変革はハンガリーとポーランドを別とすれば1年前に始まりましたが、前に言ったようにこの変革はまだ終わっていません。だからこの変革が東ヨーロッパ諸国の日本研究にどのような影響を与えたかということは今の時点では非常に言いにくいと思います。しかし私が最初に述べた変革前の日本研究の特徴やその後簡単に触れた政治変革後の動きから、これからの東ヨーロッパ諸国の発展についていくつかのことを予測できると思います。

まず最初に東ドイツの日本学を見ていきましょう。ドイツ民主共和国と言った東独は、特にホーネッカー党委員長の1981年の日本訪問の後、日本学、日本研究に非常に力を入れました。しかし日本研究は主に東ベルリンのフンボルト大学や国のアカデミーで行ったので、地域的には首都のベルリンに集中しました。第二次大戦前にはベルリンとは別にライプチヒにも日本学の講座がありまして、ウエデマイアやハミチ先生などの有名な人達がそこで働いていました。この10年間に西ドイツで日本学の講座が大分増えましたが、もし東独であった地域に講座を増やすなら、ライプチヒに戦前の講座を再建すべきであるという説が日本研究者の間から盛んに聞こえています。ライプチヒ大学では数年前から日本語教育もありますから、日本学の再建の可能性は少なくはないでしょう。フンボルト大学はベルリンの大学の中で伝統のある古い大学ですから廃止される心配はありませんが、ベルリンの両大学で日本学が今のまま続くかどうかは問題でございます。80年代まではフンボルト大学の日本研究は主に文学の研究でしたが、80年代の半ばからスタッフを前の何倍かに増やして、現代の日本経済と日本社会の研究もやり始めるという新しい動きがありました。他方で西ドイツでは、大学に日本学の講座が急に多くなり、ドイツ政府が東京にあるドイツ日本研究所のような機関まで新設しましたので、若い日本研究者が足りなくなっておりました。そういう関係では東の西への合併は、ドイツの日本研究にとって一つの品種改良という意味がもてると思います。

東ドイツの若い研究者は今まで閉鎖された世界に住んでおり、たとえ日本語の勉強のために日本にある東海大学の寮に来て、いつでもだれか先生がついていたために自由に動けませんでした。3年ごとに行われるドイツ語文化圏の日本研究者学会 (Japanologentag) にも自由に参加できませんでした。今年の9月にその学会がウィーンで開催されたときに、初めて東独の日本研究者も数人出席しました。この人達はぜいたくに慣れた、大学の多くの就職機会に甘やかされた西ドイツの日本研究者と比べてハングリーでありまして、彼らがもっている優れた日本語力をもとにこれから意欲的に——西ドイツ側が彼らをうまく利用すればと

いうことを前提に——大変いい研究をしていくと思います。

その他の国々には東ドイツと同じような恵まれた条件は存在しないと思います。もちろんほとんどの国では国民が自由に動けるようになった、あるいは近いうちになるのですから、今いい仕事を持っていない東欧の日本研究者が西ヨーロッパ、オーストラリア、北米の各大学で仕事の空きがあると、応募することも数多く現れるでしょう。また、彼らの中には日本に留学した人たちも多いので、留学時代に知り合った日本人との友人関係を活かして、日本に仕事を求めて住み着きたがる人も少なくなかろうと思います。1968年のソビエト連邦軍のチェコ侵略の前後に、チェコの日本学者の一部が西側に移住したのと同じように、今回もまた日本学者の一部が故郷を後にして世界のいろいろな国に出て行くことでしょう。

以上のことは学者個人の動きとして予測できることですが、では日本学・日本研究は東欧諸国のこれからの研究活動、大学のなかでどういう意味を持つでしょうか。私は日本の経済が世界経済の中で今と同じように重要な役割を果たしている限り東欧諸国でも日本研究が盛んに行われるだろうと思います。しかし日本研究の中で質的な変化が起こるでしょう。すでに申し上げたように今まで東欧の大学では、日本語の研究、あるいは教育と、日本文学の研究、あるいは翻訳が日本学の中心でございました。しかし資本主義経済に変わるにつれて、日本文学の翻訳書を出すのはますます難しくなるでしょう。というのは、新聞やテレビなどのマス・メディアにも日本に関する情報が増えてくると、日本への好奇心がこういうマス・メディアによって満たされるようになり、日本の小説は要らなくなると思われるからです。ソビエト連邦やポーランド以外の小さいマーケットでは本の値段が高くなるにちがいませんから、日本文学の翻訳書の読者の数は自然に減ってくるでしょう。こういう条件の変化の下では従来通りの活発な日本文学の翻訳活動は続けていけなくなるに決まっております。そして東欧の各社会が大学の日本研究者に対して新しい種類の日本研究を求めるようになっていくでしょう。それはもちろん日本の経済、ビジネス、マネージメント、財政、などなどの研究でございます。この将来の日本研究の主流をなすべき日本経済研究と比べると日本の文化の研究は副次的な役割しか果たさないでしょう。日本語教育はもちろんこういうシナリオでは、前と変わらない重要な位置を占めると推定できます。日本は戦後いち早く貧乏な国から世界一の金持ちの国に変わりましたから、東欧諸国はこの日本の成功を疑いなく参考にしたがることでしょう。他の国に先立ってハンガリーはやはり国立アカデミーの世界経済研究所で、しばらく日本経済、産業、技術の研究をやってきました。そして今年、この研究所のなかには「日本研究センター」ができあがりまして、ハンガリーの一番優秀な日本研究者の2人、アンドラーシュ・ヘルナーディとエーブア・エールリッヒがそこで活発に働いています。

梅原猛先生が最近編集なさった『日本とは何なのか』という本の「世界の日本研究」という章で、園田英弘先生はネウストプニー先生の日本研究の分類を再編成しながら、「日本学」と「専門志向的日本研究」と「課題追求的日本研究」という3つの日本研究のアプローチを区別しています。「課題追求的日本研究」の基本的動機は研究者の自国の、あるいは国際的な社会問題、経済問題、政治問題にあると説明しています。そして園田先生は「日本学」の

研究をドイツやフランスが、「専門志向的日本研究」はアメリカが、「課題追求的日本研究」は今までの社会主義圏の国々が代表しているとお書きになっています。また園田先生は、東欧の日本研究が今後大きく変化することを予想しています。つまり「課題追求的日本研究」の必要性がなくなるだろうと思われるようでございます。私の意見では、この「課題追求的日本研究」という類型は諸アカデミーの日本研究の一部にはあてはめられるが、従来の社会主義圏の日本研究の主流の類型としては適当ではないと思います。しかしすでに簡単にふれたように、社会主義を後にした国々にはいろいろな社会・経済・政治問題がたくさん現れてきましたので、日本研究者の多くはこれから自分の国々に貢献する意味でこういう問題に対する日本の解決方法を研究していく、つまり園田先生の言葉をお借りすると、彼らは「課題追求的日本研究」をやっていくことでしょう。前に述べた経済研究、ビジネス研究はもちろんこの類型の研究ですし、その他にもこの類型の研究に入る日本研究がたくさん考えられます。経済問題を別とすれば、東欧のどんな国でも最大の問題になっているのは、チェルノブイリの後みなさんご存じの通りの環境問題でございます。60、70年代の日本でも環境問題が日本の市民の大きな関心事でしたので、東欧の日本研究者は日本の環境問題の解決などを自国の参考にするために研究し始めるのではないかと予想できます。そして、官僚主義、民族主義、マイノリティ問題などの現代東ヨーロッパ諸国の問題もこれからの東欧の日本研究に反映されていくと思われまます。明治時代の日本人と似たように、東欧の人々は西ヨーロッパの国々やアメリカや日本の経済水準に追いつくのに忙しいから、ある種の贅沢を表す日本文化の研究はこの「課題追求的研究」と比べて占めるウエートは小さくなるでしょう。東欧の日本研究者の一部は、今まで非常に恵まれていて、日本にも、西ヨーロッパにも、アメリカにもよく行くことができました。しかしその他の人々は全然外国に行くための許可をもらうことができませんでした。私は去年の12月に東京で開かれた会議で20年以上日本研究をやっているソビエト連邦の一人の優れた学者に会いましたが、彼はそのとき初めて日本に来られたと言っていました。自分が日本にいることはかれにとって夢のようでした。同じ会議には何回も日本に来たことのあるソビエト連邦の学者もいました。また、今までのヨーロッパ日本研究協会の5つの大きな国際会議でも、協会が東欧諸国の代表者を呼んだときには、いつも同じような顔触れでした。ある国の噂を申し上げますと、例えばユダヤ人だという理由で数人の日本研究者が外国に行く許可をもらえなかったということがあったそうです。こういう不平等な構造をなくすこと、そして東欧の日本研究者をみんな一つの大きなヨーロッパのネットワークに入れることは、ヨーロッパ日本研究協会、国際交流基金、国際日本文化研究センター、東海大学などの団体や施設だけでなく、ヨーロッパの日本研究者一人一人のこれからの大きな課題でございます。

1991年の9月にベルリンで開催される国際日本研究会議はこの目的に貢献しうらだろうとヨーロッパ日本研究協会は信じています。すでに申し上げたようにこの協会は1972年の日本ペン・クラブの国際日本文化研究会議をきっかけにはじめて具体化されました。私個人の意見に過ぎませんが、東ヨーロッパの日本研究者のためには今また同じような会議が必要とされていると思います。東欧の日本研究者200—300人が京都に集まることができ、この日本の

文化の中心の都市で日本の学者と今まではできなかった自由な雰囲気で見聞交換をすることができれば、それは18年前のペン・クラブの会議が世界の日本研究の発展に果たしたような大きな役割を将来の東ヨーロッパの日本研究の発展のために果たすことでしょう。